

セブンスデー・アドベンチスト教団

アドベンチスト

November

SDA

はらしじゆく

11

「私達は神様の証人」

北アジア太平洋支部牧師会会長・公衆伝道者

リ・ザイリョン
李在龍

イエス様は、ご昇天の前に弟子達に対して、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらには地の果てまで、わたしの証人となるようにと言われました（使徒前記 1:8）。このイエス様の命令は、彼に従うすべての人々に向けられています。愛する弟子達を後継するイエス様の最大の関心事は、どれほど早く彼らを天国に連れて帰るために戻って来られるかという点でした。

マタイ24章で、イエス様はご再臨の前に起こるであろう多くの前兆について述べられました。これらの前兆は、イエス様がまもなく来られるということを人々に知らせるものです。また、マタイ24:32-33で、「いちじくの木からこの葉を学びなさい。その枝が柔らかくなり、葉が出るようになります。夏の近づくことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たら、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」と言われました。そしてマタイ24:14では、ご再臨の最後のしるしについて述べられました。御国の福音が全世界に宣べ伝えられたときに最終に来ます。福音のメッセージは、イエス・キリストの再臨前にすべての国と民に伝えられます。

弟子達に最後の前兆に気づかせると、イエス様は「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたすべてのことを守るように教えよ。（マタイ28:19-20）と言われました。そしてまた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。（マルコ16:15）と言われました。福音の使命は、ご昇天の前に、オリーブ山で弟子達に対して繰返されました。イエス様は、天国の家に弟子達を連れて帰るために早く戻って来たいため、何度もそのことを繰返しました。

イエス様に従うクリスチャンとして、私達はこの使命を非常に真剣に捉えなければなりません。福音の使命は、人々を救うためのものであり、イエス様は私達をこの驚く

べき働きを行うための器として用いておられるのです。仲間の人々をイエス様に導くことができるのは、キリストに従う人々の大きな特権です。同時に、大切な責任でもあります。それは、師イエス様に任されているがゆえに、クリスチャンが自由に選択できるものではなく、果たさなければならぬ義務なのです。

神様は、恵みによって、私達を救って下さいました。イエス様は、私達を「選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民」にして下さり、使徒ペテロは、「暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを語り伝える（ペテロ2:9）ことを私達に望んでおられるからであると言っています。私達がキリストに従う者としてしなげればならぬことは、イエス・キリストを知らずこの暗闇の世界で眠っている人々に福音を伝えることです。

9月7日から14日まで東京中央教会で行われた伝道集会の中で、真実の「新しい驚くべき発見」を人々に示しました。伝道集会の終りとなる安息日には、3人の尊厳者がバプテスマによって生まれ変わって神様の御国への仲間入りを果たしました。もっと徹底的に聖書を勉強することを約束した人たちも数人いました。更に数十人の人たちがこの伝道集会でアドベンチストのメッセージを耳にしました。これらの人たちの心の中に落ちた福音の種は、これから成長し、最後は御国の倉庫に収穫されることなるでしょう。

私達の仕事は「時が良くても悪くても」（テモテ4:2）福音の種を蒔くことであり、神様が「成長させて下さる」（コリント3:7）のです。「仕事を始めるのは神様であり、それを終えるのも神様です。（「牧師と福音伝道者への勸告」507）。

私達は、地の果てまで、神様の証人なのです。

「心に染めよう」(沖縄だより)

千先 稜

沖縄を代表するわらべ歌に『ていんさぐぬ花』という歌があります。この歌は教訓歌といわれ、歌詞がとても長く、味わいのある歌です。有名な出だしの部分をご紹介します。

「ていんさぐぬ花や 爪先に染みてい
親の寄せ言や 肝に染みり」

この歌は曲調もゆったりとしていて良いのですが、それ以上に歌詞の深さに多くの人が感動を覚え愛してやまないのではないかと思います。広く沖縄で歌われています。

歌詞の意味は次の通りです。

「鳳仙花の花は 爪先に染めて
親の教えは 心に染めよう」

この歌詞にあるように、最近ではあまり見かけなくなりましたが、花を摘んで爪を染める遊びが、古くから子どもたちのあいだではやっていました。さらには、爪に塗ってマニキュアをする女性もいたそうです。このように、爪先に染めるように親の教えや約束もしっかりと心に

染めようというメッセージの歌は、私たちの生活を豊かにしてくれます。

しかしながら実際は、水などで手を洗うと爪の色がとれてしまうのだそうです。

ひとたび、水につけると落ちてしまう色や、いつかは枯れてしまう鳳仙花のはかなさ以上に、親の教えの確かさや持続性について私たちに教えているのかもしれない。親の教えを素直に受け入れ、軽視したり怠ったりせず、しっかりと心に止めて忘れないようにと訴えているのでしょうか。

同じように、私たちは神様の教えである聖書を知っています。しかし、私たちはときどき神の言を忘れてしまうことがあります。それをしっかりと心に蓄えることが、私たち自身を守ってくれるのだと思います。親の教えもそうですが、私たちの益になるものだからこそ、神様の色を私たちの心に染めたいものです。自分という色にではなく、神様の色に染め上げたい。そのためにも聖書にある御言葉を謙虚に受け入れていきたいものです。

(沖縄三育中学校教諭・元コミュニケーション部)



ホウセンカ ツリフネソウ科
熟した果実に触れると種子が
勢いよく飛び散ることから、
英語名はtouch-me-not。
キツリフネ(黄釣船)とも。

花の皆さん いちかたう ! ~毎安息日、美しい花に見守られて~
今月、この第2ページは「フラワー・ページ」となりました。毎金曜日、花の皆さんが講壇に準備くださる花のほんの一部です。毎日のことながら、カラーでいのちが輝きます。(撮影:芳賀 洋)



3月9日



9月14日



10月5日



10月19日

「わが子と和らぐ道」

思春期を親子で生きぬくために一

10月5日(土)午後、第四回家庭会セミナーが講師の安積力也校長をお招きして開かれました。「一人の真実の話から、何を考え、何を信じ、何を願うのか」先生のお言葉のとおり、八十数名の参加者に様々な「何か」を投げかけた意義深いひと時。参加者の声の一部をご紹介します。

心をかける教育

私どもには思春期に入ろうとしている子供がおります。子供をどのように育てるべきか、どのような方向に進めるべきかを考えつつ、目の前にあるやるべきことを必死にこなす毎日です。「子供は親の思い通りにならない」「子供一人ひとりに“個”があり、その子に適した教育も一人ひとり違う」ということは頭の中ではわかっているのですが、まだ人間が未熟のため親の思い通りにいかないと、瞬間湯沸し機になってしまうことがしばしばです。

安積先生からは、ご自身のお子様の事や聾学校での事を伺い、とても共鳴でき安堵と勇気を与えていただきました。1) 神様がこの子を授けられたのは、この子のためであること。2) 聾学校での耳が不自由な方が持っている数少ない正常な聴覚神経を最大限に活かす教育のお話から、子供の能力を最大限に引き出す努力を親としてしなければならぬということ。3) 「手をかける教育」より「心をかける教育」が大切であること等、私どもが理解し実践すべきことを学ばせていただきました。ありがとうございました。(宮原 秀俊、真子)

無条件の愛

広い野原の真ん中で、心細そうに泣いている幼い女の子がいた。かわいそうに思って近寄ってみたら幼い頃の長女だった...という夢をどうして見たのか、ずっと不思議でした。安積先生のお話を伺って、アツと思いました。子育ては卒業したと安心していただけ、重大な自分のミス(罪)に、33年経ってやっと気がついたのです。義務感と責任感が先走りして手はかけたが心はかけていなかったんだと。未熟な私から生まれ、それでも曲がらずに育ってくれたことを神様に感謝し、心の中で娘にわびました。

安積先生の二人のご子息と偶然の出会いがあったことも含めて、すべて神様が私に対してお取り計らいくださったに違いないと信じております。(佐藤義子)

佐藤さん含む5人のメンバーで先生に歌のプレゼント。不思議な巡り合わせを喜び交わされた握手は感動的な場面でした(編)

避けられない神からの宿命

『これは避けられない神からの宿命と感じた。』聾学校校長就任前の安積先生の言葉から、常日頃仕事上の立場で悩む私は、「やはり宿命なのだ。そう思うしかない。」という諦めと共感、「先生も悩まれたのだ。」という慰めと、「辞めないでもう少し頑張ってみよう。」という励ましを戴いた。また先生は我が子を愛せなかったことを告白された。教師やクリスチャンのイメージとは相反するが、イメージを恐れず、立場に脅えず、誰もが持つ人間の醜い本質を自らしっかりと捉え、立ち向かわれたお話は、一層私の悩みを解決へと導いてくださった。これは先生の信仰と教育への強い姿勢の現れと思う。そしてそのことに深く感動した。感謝と尊敬の思いで一杯である。(若月牧子)

自分は自分自身を受け入れているか

先生は重い経験の数々を、深い自己洞察に裏打ちされた言葉で丁寧に語って下さいました。頂いた数々のエッセンスと根源的な問いー子供を受け入れているか、自分は受け入れられたことがあるか、自分は自分自身を受け入れているか等々を反芻しながら子供と向き合っていくたく思います。私自身生きる意味を求め長くさ迷った日々を経て、神様の愛の中で生かされている真理を知ることによって平安を得るに至りましたから、祈りをもって子供の変容をゆっくり見つめるのが楽しみとなりました。こうした機会を

ご準備下さり感謝です。(和田弥生)

闇の中の光

医師の仕事をつきつめて考えてみると、正しく診断し、それに基づいて治療することに尽きる。この度、安積先生のお話を伺って、あらためてそのことを思った。正視できない程の現実から目を背けずに真剣に向き合うことから光が見えてくることを教えられた。我が子でさえ愛せない悲しい存在であることに気づいた時に、本当に人を愛する道へと導かれる神の恵みに心から感謝したい。(金子盾三)

哲学を持って生きる意味

「光が当たるほど影が濃くなる。一つのものを見ていると、他は見えなくなる。闇の中だからこそ光が見えてくる」という安積先生の哲学的な導入にぐっと引き込まれました。なるほど、確かにそうなのです。自分の日常に引き戻して考えてみても、思い当たることが多々あります。

「あなたの子供時代はいつ、どこで終わったのか?」という問いかけがありましたが、自分探しをしていた中高時代をすぐに思い出しました。自分の前に広がる霧、細い道。それが途中で消えかかっている。でも自分一人で歩いていかなければならない心細さ。特に高校時代は精神的に追い詰められた時代でしたが、この時期に大いに悩んでおいてよかったと今さらながら思っています。

今回の安積先生の講演を通し、哲学を持って生きる意味について大いに啓発されました。10歳と13歳の子を持つ親として、今後の指針にしていくつもりです。安積先生、ありがとうございました。(永田慎二・多摩永山教会)

未解決の問題と向き合う

「あなたの子供時代は、いつ終わりましたか?」最初からハツとする質問をなげかけられて始まった安積力也先生のセミナーであったが、会衆はその真摯な語り口にどんどん引き込まれていく...。冒頭の質問は、思春期のはじまりは私たちが考えるよりもずっと早いのだ、と気づかせてくれるものだった。毎日メディアをにぎわす、若年層のさまざまな問題。その一つ一つが、実は子供たちではなく親である、私たち自身に原因があったのだ! 私たちの誰もが、こころ

の中に持つ「未解決の問題」それともう一度しっかり向き合うことが、結果的に思春期の子供たちと共に生きることにつながるのだ、というズシリと重たいメッセージを私たちは受け取った。(小川圭一・入間川教会)

未解決な問題の解決法

～思春期を親子で生きぬくために～というサブタイトルでしたので、最初は独身の私は対象者ではないと思いましたが、きっと近い将来??の役に立つのではないかと思い参加しました。話が進むごとに先生の穏やかな雰囲気と、一つ一つの言葉を大切に語られる口調に、いつの間にかグングンと引きこまれていきました。

特に印象に残ったことは「自分の中の未解決な問題は自分よりも弱者にあたってしまう...でも自分の中で解決できる」というメッセージです。私自身未解決な問題があり、また、これからさまざまな経験をして行く中でも起こり得るかもしれません。そんな時に先生からお聞きしたことを思い出し、希望を持って歩んでいきたいと思っています。解決は個人、親子間だけではなく、夫婦間でもできると信じて...

(牛田きぬ・立川教会)

絶望の淵にあっても祈れる人

私の引きずっている負の遺産は何だろう。あの日以来ずっとその間に向き合い、三世代同居の孫にそれが現されているのに気付かされています。教会ならではのセミナーで、絶望の淵にあっても祈れる人をこれほど羨ましく思ったことはありません。(原田安恵・教会員友人)

子育てに遅すぎるということはない

子育てに遅すぎるということはない、とのお言葉に励まされて帰宅いたしました。私のためと思うような内容でした。なんだか前より、子供を愛おしいと感じることが少しだけですが多くなったように思えます。(3人の子供の母)

今年の家庭会セミナーは安積先生をもって終わらせていただきます。毎回当初の予想を上回る参加者が与えられましたこと大変うれしくご協力をご感謝申し上げます。今この時代、問われているものは何かを共に考える時となりました。来年は、日野原重明先生、小塩節先生のご講演が予定されております。引き続きのご参加をお待ち申し上げます。(家庭会一同)

原宿彩

ウェルカム、アロー先生

すでに、週報などでご案内のとおり、このほど TICでは、新任のヒュ・ゴ・アロ - 牧師(Hugo Alor, 36歳)をお迎えしました。メキシコ生まれ、もと同国クライスラー社の技師でしたが、プエルトリコでの伝道活動に転じ、のちアンドリュース大学で学ばれました。牧界での初のご奉仕となります。奥様オルガさん(Olga)はプエルトリコご出身です。長男のルイス君(Luis)は7歳、長女のエランディーちゃん(Erandi)は4歳。皆様、どうぞよろしく。



んにお会いになったら、「ミルディータ」と声をかけてあげてください。ミルディータとは、アルバニア語で「こんにちは」という意味です。

花田唯^{めい}ちゃんデス！ どうぞよろしく

お父さんは憲彦さん、お母さんはゆかさん。この10日で生後31日めを迎えます。誕生時の体重は3,072g、母子ともにお元気です。3日目のお顔をご紹介します。



好天に恵まれて - バザー(10月27日)

10月の最終日曜日、恒例の教会バザーが見事な秋晴れのもと、大勢のお客様を迎えて開かれました。総売上51万275円。皆さんの活動ぶりは誠に手慣れた感じで、これに新メンバーも加わって、心強い限り。終了時間(2時)になっても名残り惜しそうなお客様少なからず、来年はいつですかという問合せしきりでした。今回は別項でご紹介したベシアナちゃんのお父さんも、逞しいお力を発揮して、準備に後片付けに大活躍して下さいました。準備に運営にご奉仕下さった皆様、ありがとう。

家庭会セミナー (10月5日)の録音テープを準備してあります。2本・600円。お申込みは書籍係の関正さんまで。写真は当日の講師・安積先生。



ミルディータ！

コソボ紛争で大きな火傷を負って、日本での手術が続いているベシアナ・ムスリューちゃん(6歳)が、橋本笙子さんらADRAのメンバーに伴われて、10月26日の安息日学校に、愛くるしい笑顔を見せてくれました。大人でもつらい手術に耐えるベシアナちゃんの上に、神の御慈みをと願わずにはいられません。彼女は来年3月まで、橋本さんのお宅に滞在します。

アドラからのお願い-安息日にベシアナちゃん

俳句

浦安の古き家並や鶯日和
 赤とんぼ右印西の道しるべ
 厭きるまで犬のなすまゝぬのこづち(武國)
 野分立ち艶けき声の鳥群れる
 栗のいが踏みてタイヤを覗きけり
 祭礼の寄進の掲示時雨けり(保夫)
 夕日映ゆ浜辺の靴あと秋惜しむ(茂子)

バイブル豆事典

「誕生」

子供の誕生は嬉しいものである。聖書時代のパレスチナでも、それは大変喜ばしいこととされた。出産が近づくと、大勢の人々が家の周りに集ってくる。誕生が知らされると、男の子の場合には、音楽が奏でられ、祝福のどよめきがどっと上がった。しかし女の子の場合には、人々は静かに残念そうに立ち去るという。「男の子の誕生は全世界の喜び、女の子の誕生は全世界の悲しみ」とさえ言われた。我が家の場合は女の子だったが、周囲は祝福してくださり、ほっと一安心(笑)。

さて、創世記によると、神が最初の人を造られたとき、まず体を造り、その後に命の息を吹き込まれ、それによって初めて人は生きた者となったと記されている(2:7)。「息」とはすなわち「神の霊」である。神の霊が吹き込まれなければ、人は人ではありえないのである。我が子を初めて抱いた時、私は不思議な感動を覚えた。この子には神の霊が注がれているということに。つまりこの子は偶然生まれてきたのではなく、「この世で生きよ」と言われる神の明確な御計画のもとに生まれてきたのだ。これが聖書の考え方である。それは進化論的なものの考えとは正反対の思想だ。進化論的な価値観から生まれた共産主義は、人間は「偶然」によって生まれてきたものであると主張する。だから人を大切に扱わない。どこかの国による拉致事件もそのような思想の背景があって生じたものだ。しかし聖書は言う。「あなたは愛されている大切な存在なんだよ」「あなたは愛し、愛されるために生まれてきたんだよ」これが人の誕生時に込められる神の願いである。

(東京中央教会副牧師・花田憲彦)

11月のスケジュール

- 11/ 1(金)~3(日) 英語学校バイブルキャンプ
 / 2(土) [説] 板東洋三郎牧師 & 子供のお話
 役員会
 長老会
 小羊クラブ 14:00~15:00 集会室
 / 9(土) [説] 板東洋三郎牧師 & 子供野外礼拝
 週報 & アドベンチストはらじゅく発送
 理事会 15:00~
 / 10(日) 教会大掃除
 / 15(金)~17(日) コワイヤー合宿(軽井沢)
 / 16(土) [説] ウォ・タ・ズ 今日子副牧師 & 子供のお話
 / 23(土) [説] 我妻清三牧師 & 子供のお話
 小羊クラブ 14:00~15:00 集会室
 / 24(日) PFC野外礼拝
 / 30(土) [説] P.D.Chun(NSD総理) & 子供のお話

教会のホームページを開設しています。

<http://www.sda.gr.jp>

エデン ED園だより

第2頁花のミニ特集に関連して「花係」の府録智子さんに伺いました。花は毎週花屋さんから届けてもらうほかに、ご自分で遠くまで捜しに行く係の方もおいでとか。準備の際、水の入った花台は重く、かなりの力仕事のようなのです。毎週飾った花を片づける際も、水の取り替えをはじめ難儀でしたが、今は清掃の方がやって下さるので大助かりとのこと。今後も四季折々の彩り添え、よろしく願いいたします。(YY)

発行：東京中央教会コミュニケーション部 * 発行人：板東洋三郎 * 編集人：前中靖司
 [住所] 〒150-0001 渋谷区神宮前1-11-1 03-3402-1517

* スタッフ：久木田明夫・佐藤敏子・寺内雅子・芳賀洋・平山茂子・森武靖子・山口保夫